

天馬の記

劇作家

岡部耕大

(75)



渥美清さんは、よくわたしの演劇を観劇にいらした。野球帽を深くかぶり、うつむいて受付を通る。どんなに変装しても渥美清だとすぐにわかった。変装はどんなに上手にしたつもりでも見破られるものである。まして、盆暮れには欠かさず見ている。

た寅さんの渥美清である。変装ごときに騙されるはずがない。渥美清さんはわたしの演劇を見に来たわけではなく、わたし

の演劇に出演している夏木マリさんを見に来ただけである。夏木さんは、わたしの舞台「お

た寅さんの渥美清である。わつぽを向いたままであった。わたしには好きな人にそつぽを向く悪い癖がある。これでどれほど損をしたことか。

松本清張原作の山田洋次監督や正月に庶民は落語の主人公のような寅さんに共感の笑いをし

「無告の民」を描く

「無告の民」で主役を張っていた。江戸っ子は「あいつはお俠な娘だ」と冷やかかし気味に使ったりする。その言葉をちようだいたした。

住まい時代。結核を患った浅草時代や踊り子との弾むような羨ましい友好関係。どれもこれもにもフーテンの寅さんが生きていく。山田洋次監督の満州時代や松竹の助監督時代のエピソードにも日向と陰、表と裏があるように面白い。

い。庶民派の名にふさわしい。ひと癖もふた癖もある監督や俳優が葛飾柴又の根っからのいい人を書き演出し、演じたのである。面白いわけではない。

寅さんが旅をする場面は長谷川伸の時代劇を見るように面白い。「あいつ、バツカだなあ」。盆告の民である。(松浦市出身)

夏木マリさんが寅さんに出演していた頃である。山田洋次監督とも築屋の夏木さんの部屋の前で擦れ違ったが、わたしはそ

あるように面白い。

寅さんが旅をする場面は長谷川伸の時代劇を見るように面白い。「あいつ、バツカだなあ」。盆告の民である。(松浦市出身)

寅さんが旅をする場面は長谷川伸の時代劇を見るように面白い。「あいつ、バツカだなあ」。盆告の民である。(松浦市出身)